

オアシス



「お菓子の家」と「パンケーキの実る木」

—グリム童話を考える②—

大野 寿子

グリム兄弟『子どもと家庭のためのメルヒェン集』（通称『グリム童話』）の第一五番「ヘンゼルとグレーテル」（KHM15: Hansel und Gretel）⁽¹⁾のドイツ語オリジナルには、「お菓子の家」が登場しないのをご存知だろうか。

貧乏な木こりの子ども二人が、食糧不足のために森に捨てられ、空腹で倒れそうになりながらさまよい歩く。そして、白い小鳥に導かれた兄妹は、森の中の小さな家へとたどり着く。近くで見ると、「その家はパンでできていた」という。さらに、「屋根が焼き菓子で葺いてあり、窓は白砂糖でできていた」のだ。もうお気づきと思うが、原語では「パンの家」(Brothaus)⁽²⁾なのである。屋根は「焼き菓子」とあるが、この単語はドイツ語でKuchen⁽³⁾という。日本でもおなじみ「バウム・クーヘン」⁽³⁾のクーヘンであり、スポンジケーキのようにやわらかいものから、クッキーのように少し固めのもの

まで、火が通った「焼き菓子」を幅広く指し示す。当該箇所⁽¹⁾の和訳ではやはり、「クッキー」と訳されることが多いようだ。また、窓は「白砂糖」でできていたとあるが、原語はheller⁽⁴⁾Zucker⁽⁵⁾で、「明るい色」の（あるいは「白色がかった」）「砂糖」という意味である。この窓の箇所は「氷砂糖でできた」と訳されることが多く、またその方がイメージしやすいのかもしれない。このように、「パンの家」全体が甘いイメージをかきたてているので、「お菓子の家」という意識も悪くはない。「パン」にしても「焼き菓子」にしても「白砂糖」にしても、どれもが人の手を介さなければ作成されないものであり、それが、森という自然空間に出現するのは興味深い。話は次のように続く。「パン（お菓子）の家」にたどり着いた空腹の二人を、家主である老婆が中へ招き入れ、「ミルク、砂糖入りパンケーキ、リング、くるみ」などのご馳走でもてなし、白いシー



図A バンチナル作「ヘンゼルとグレーテル」(2006年)

ツの張られた綺麗なベッドを与える。二人は、「ここはまるで天国みたいだ」と感じ休らう。この老婆は、実は、子どもを食べる悪い魔女であり、ヘンゼルは閉じ込められて太らされ、グレーテルはこき使われて憂き目をみる。そしてグレーテルが、パン焼き釜で魔女を焼き殺す。自由の身となった二人は、魔女の宝を手にして家へと逃げ帰る。帰り着いてみると、自分たちを捨てようと発案した継母はもう死んでおり、実の父親と三人、幸せに暮らしたということだ。

パン焼き窯をめぐるさまじくまな解釈、そもそも魔女とは何なのかという問題、あるいは、グレーテルの殺人行為、子ども達の窃盗行為への批判などもあるのだが、それらは別の機会に譲るとして、

ここで考えていきたいのはやはり、森の奥深くに存在する「パン(お菓子)の家」についてである。魔女の魔法によるものだから、何でもありだというわけではない。この甘味のイメージには、実は源流なるものが存在するのである。

* * *

さて、全一一話からなる『子どもと家庭のためのメルヒェン集』第七版決定版の第一五八番は、「のらくら者の国のお話」(KHM158: Das Märchen von Schlauffraffenland)である。「シュラ[ウ]ラツフエン・ラント」(Schlauffraffenland)という名前の「のらくら者の国」に行って来た者が語る自慢話(ホラ話)であり、内容が奇想天外である。「のらくら者の国」では、「枝を広げた菩提樹になんと、ホカホカのパンケーキが鈴なりだった」という。地面から生えた菩提樹の実が、火を通したパンケーキだというのは、広大な森に、火を通した「焼き菓子」や「パン」でできた家が存在するのと同様のミス・マッチである。さらにこの国は、「甘いハチミツが川のように谷間を流れて山へと登って」いたり、カラスが草刈りをしたり、赤ちゃんが母親をあやしたりする不思議な国なのだ。

グリム兄弟は、文化、文学、言語、歴史、法律の研究者であり、大学教授でもあった。これらの研究を活かして二人は、『子どもと家庭のためのメルヒェン集』第二版(二八一九年)刊行後の一八二二年に、このメルヒェン集の『注釈書』を出版する。「のらくら者の国のお話」の注釈として彼らは、「この寓話」が、「中世に源を発する」と記している。正確にいうとこの話は、「二三世紀の古いドイツ詩の一つに由来して」おり、ほどなく「滑稽路線」をとるようになるという。まさに自慢話ホラ話の路線である。ところが同様の寓話が、「疑うことを知らぬ子どものため、茶化されず真面目に登

場するのが、屋根がパンケーキで葺いてあり、梁はシナモンでできているというあの小さな砂糖の家についてのメルヒェンなのだ」というのである。この「小さな砂糖の家についてのメルヒェン」とは、まぎれもなく「ヘンゼルとグレーテル」のことを指している。ところが、決定版「ヘンゼルとグレーテル」の「パン（お菓子）の家」は、屋根が「焼き菓子」、窓が「白砂糖」でできており、この描写は、初版印刷前の手書き原稿（通称エーレンベルク稿）から変わることはなかったのだ。それにもかかわらず、この「パン（お菓子）の家」について、当のグリム兄弟が、「パンケーキ」、「シナモン」、「砂糖の家」と、少々違った表現をしているのは興味深い。

そもそもグリムの「ヘンゼルとグレーテル」は、彼らの故郷ヘッセン地方（当時はヘッセン国）の、よく似た話（類話）を総合したものであった。ちなみに、シユヴァーベン地方（南部ドイツ）の「ヘンゼルとグレーテル」類話には、「魔女の住むパンの家」ではなく、「オオカミが住む小さな砂糖の家」が登場する。また、カロリーネ・シユタールが刊行した『メルヒェン集』（一八一八年）には、「砂糖細工の小さな家」が登場する。「ヘンゼルとグレーテル」型の話には、このように類話が多数存在していることを、伝承文学研究者であるグリム兄弟はよく知っていたのである。すると、『グリム童話』の「パン（お菓子）の家」とは、多種多様な形態で伝承されてきた「砂糖菓子の家」の一つのバリエーションなのだということがわかる。

* * *

「ヘンゼルとグレーテル」の「パン（お菓子）の家」のモチーフが、「のらくら者の国」話と関わり深いことがわかった。グリム兄弟は『注釈書』の中で、ドイツ語圏における「のらくら者の国」話の最古の記録を二つ挙げています。まず、一五世紀ドイツの職匠歌人ハンス・ザックスの笑話が一つ。そして、一六世紀フランスの作家フランソワ・ラブレール「ガルガンチュア・シリーズ」（大男ガलगンチュアの不思議な冒険譚、風刺小説）の、ヨハン・フィッシャルトによるドイツ語訳である。フィッシャルトの翻訳から次の箇所を、グリム兄弟は引用している。

クリスマスの彼方三マイルの所には、レープ・クーヘン^⑥の壁、ローストポークの梁、マルヴァジア・ワインの湧く泉があり、ミルクの雨、砂糖マメの雹が降る。ここでは、おふざけには賃金が、いねむりには謝礼が支払われる。そしてそこには、血入りソーセージの垣根、ハチミツの漆喰、パンケーキの屋根がある。

このように、「のらくら者の国」のイメージには、調理された肉料理、アルコール類、そして何より甘い食べ物が必要なのである。エアハルト・シエーンが一六世紀に作成した木版画には、レープ・クーヘンの家の横に座り、ご馳走を口にしている人々が、シユラ



図B Erhard Schoen の木版画 “Das Schlauffenlande” (16世紀)

「ウ」ラッフェン・ラントの風景として描かれている〔図B〕。

この「のらくら者の国」とは、とどのつまり、現実性を失ってしまった美食のパラダイスであるようだ（ディーター・リヒター『シユララッフェン・ラントー民衆ファンタジーの歴史』）。また、この国は、キリスト教世界の厳しい戒律の反動として表れる「酒

たりする「生命の水」のモチーフとも縁がある。日本でいえばさしずめ「養老の滝」であろうか。さらにリヒターは、この「飽食の楽園」が、「焼き菓子国」や「甘味の国」を指す傾向が強くなったのは、グリム以降だと指摘する。グリム兄弟の描いた「ヘンゼルとグレーテル」の「パン（お菓子）の家」が、後世に大きく影響しているようである。

「この世の楽園」あるいは「地上の天国」としてイメージされる「シユラ」ラッフェン・ラント」は、厳しい戒律の反動であるだけでなく、戦争、ペスト、天候不良などに起因する民衆の飢餓体験と、不即不離の関係にあるという（イレレーネ・クラウス『美しい挿絵の焼き菓子年代記』）。飢餓と飽食というコントラストは、「ヘンゼルとグレーテル」の最初の食料不足状態と、それだからこそ表れる、食料充足願望としての「パン（お菓子）の家」というストーリー展開からも、理解できるのではないか。

『グリム童話』の「ヘンゼルとグレーテル」の「パン（お菓子）の家」と、「のらくら者の国の話」の「パンケーキの実る木」とをつなぐもの、それは、普遍的な「飽食」への願望と、特に、ヨーロッパに古くから伝わる「飽食の楽園」のイメージなのである。そして何より重要なのは、この関連性を、グリム兄弟自身が認識していたということだ。

池肉林」のイメージであり、実は、ヨーロッパの至る所に存在するという。このドイツ語で「シユラ」ラッフェン・ラント」というパラダイスは、フランス語では「コカーニュ」（Cocagne、Cognac）、英語では「コッケニー」（Cockney）、イタリア語では「クッキアーニア」（Cuccagna）とびつ名で呼ばれているそうだ。このような飽食の楽園のイメージは、病気を癒したり若返らせ

*本稿は、「大きなかぶ」はなぜ抜けた? — 謎解き 世界の民話』(小長谷有紀編、講談社現代新書、二〇〇六年)の第二章に執筆した、「森にお菓子の家があるのはなぜか? グリム兄弟の視点と酒池肉林のヴィジョン」の一部を書き改めたものである。より詳しく知りたい方は、同書を(覧下さい。

注

- (1) 『子どもと家庭のためのメルヒェン集』は、グリム兄弟(兄ヤーコブと弟ヴィルヘルム)によって一八二二年に初版第一巻、一八一五年に初版第二巻が収集刊行された。一八一九年に第二版、一八三七年に第三版、一八四〇年に第四版、一八四三年に第五版、一八五〇年に第六版、そして一八五七年に第七版が刊行され、その後相次いで兄弟が亡くなったため、この第七版が「最終決定版」と呼ばれるようになる。決定版には、二〇一の「メルヒェン」(ただし通し番号は二〇〇番まで)と、一〇の「子どものための聖人伝」が収録されている。通し番号一五番の「ヘンゼルとグレーテル」は、『子どもと家庭のためのメルヒェン集』の原語(ドイツ語) Kinder- und Hausmärchenの頭文字KとHとMをとり、KHM15と略記される。
- (2) 一般的には「兄妹」と認識されているが、原語(ドイツ語)では、「兄妹」なのか「姉弟」なのか判別できない。
- (3) バウム・クーヘン(Baumkuchen)のバウム(Baum)は木という意味なので、木の年輪を思わせる切り株型の断面をもつこのお菓子には、お似合いのネーミングであろう。
- (4) 「継母」(Stiefmutter)となったのは第四版(一八四〇年)からであり、第三版(一八三七年)までは単なる「母」(Mutter)すなわち「実母」と記されていた。このように、「グリム童話」は特に弟のヴ

イルヘルムによって改編改作がなされている。「ヘンゼルとグレーテル」に限っては、特に第四版と第五版の間で大きな違いがある。ちょうどその頃出版された、アウグスト・シュテーパーの『アルザス地方のメルヒェン集』の影響を受け、加筆されたようである。ここでは混乱を避けるため、第七版決定版を使う。

- (5) 「シュラウラッフェン・ラント」(Schlaraffenland)とも称し、後者の方が一般的である。
- (6) 薬味とハチミツ入りの焼き菓子。クッキーより柔らかく、スポンジケーキより堅い。クリスマスが近くなると好んで食される、いわばドイツの冬の風物詩の一つといえよう。

出典

- 図A 小長谷有紀編『大きなかぶ』はなぜ抜けた? — 謎解き 世界の民話』(講談社現代新書、二〇〇六年)、四九頁。
- 図B 同書 五八頁。[Dieter Richter: Schlaraffenland. Geschichte einer populären Phantasie. Köln 1984, S. 29.]

参考文献

- Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. 3 Bde. nachgedr. u. hrsg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart 2001.
- Heinz Rölleke: *Angst Stobers Einfluß auf die Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Zur Textgenese der KHM5 und 15*. In: *Fabula*. 24. Jg. (1983), S. 11-20.
- Irene Krauss: *Choronik bildschöner Backwerke*. Stuttgart 1999.
- Dieter Richter: *Schlaraffenland. Geschichte einer populären Phantasie*. Köln 1984.